

白川の大家族

遠山家は 19 世紀と 20 世紀初期の白川南部で最も大きく力のある一族でした。20 世紀初頭には、一族の 45 人ほどが、1850 年頃立てられたこの遠山家に一緒に住んでいました。現在白川集落の南部や北部と呼ばれる地域では、農地が限られていたため、後継者（普通は長男）以外の子供達が家を出て新しい家族を始めるのではなく、一族が一つの屋根の下に住み続けて同じ畑を耕す、このような共同生活の形式がよく見られました。大家族同居の形態は、白川郷の人々が養蚕（カイコの飼育）を主な生活手段としていた明治時代（1868 年-1912 年）に入って更に制度化され発展しました。養蚕は手間のかかる仕事であるため、家長は子供たちや孫たちを一家に留めて労働力にしようとしていました。